

勇敢な意気地なし

第 21 期生 伊東 大志

ただ漠然と、大学生活において何かを成し遂げたいという思いで小野ゼミに入会したのが 2 年前であることを再認識し、時間の流れの早さに驚かされた。

小野ゼミ生としての活動が始まり、その活動に必要とされる思考力の質と量に驚かされた。小野ゼミ基準に準ずるならば、私は小野ゼミに入会するまで、頭を使ったことがなかったということを知り、自信を失った。思考力は、思い立ってすぐ身に付けられるものではなく、自分の能力は足りていないのに、小野ゼミの活動は目まぐるしく進んでいくというギャップに苦しんだ。活動開始前には、同期の先頭に立ち頑張ろうと意気込んでいた私は、活動が始まると、その活動についていくので精一杯であった。

幼い頃、私は、内気で、甘えん坊で、まとめると意気地なしの性格だった。そのような性格を直したいと思い幼少期から高校までサッカーを続け、意気地なしの性格を克服したつもりであった。しかし、小野ゼミの活動が始まってすぐに自信を失い、意気地なし自分が再び表面化しそうになった。そして、頭の良くない私には、小野ゼミは向いていなかったのではないかと、という考えが何度も頭をよぎった。

それでも、私が小野ゼミの活動を続けたのは、小野ゼミの活動を成し遂げた先にどんな景色が待っているのかということを知りたかったからだ。そのために、考えて行動しては間違ふということを繰り返した。私は、最寄りの津田沼駅から自宅まで約 15 分自転車を全力で漕ぎ帰宅する。その時間は、私にとって反省と後悔の時間であった。どうしてこうしてしまったのだろう、と夢中で考えこんでいると、帰路の途中にある大きな谷を悠々と超え、気がついたら家に到着していることがよくあった。落ち込みながら、必死にもがき、活動に取り組んだ。そうすると、徐々にではあるが、どのようにしたら周囲を納得させるような説明ができるのか、あるいは、正しい論理関係を説明できるのか、ということがわかるようになってきた。意気地なしの自分を引きずりながら、それでも徐々に何か積み重なっていく感覚が嬉しかった。そして、順調とは言い難かったが、小野ゼミの活動を成し遂げて、今現在、このエッセイを執筆している。

さて、2 年越しの私の念願であった、小野ゼミを成し遂げた先の景色は、どのようなものであったか。私は、私の場合は、と言えるかもしれないが、まず、抜群に頭がよくなったり、特段に行動力が増したりすることはなかった。少しだけ賢くなれたり、わずかに忍耐力が身についたりしたかもしれない。卒業論文を書き終えた今、それでも、私には依然として足りないことだらけである。1 つ、明確に成長した部分があるとするならば、それはなにかに挑戦するための勇気を身につけたことである。社会に出て、次の景色を見るための道中には、再び困難が待ち構えているかもしれない。依然として足りないことだらけの私は、それでも、小野ゼミで得た少しばかりの勇気を抱えて、次の景色を見るべく挑戦を続けたい。